

## 学術英語カリキュラムの追求 : 2018年度九州大学英語新カリキュラム

鈴木, 右文  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1932334>

---

出版情報 : 英語英文学論叢. 68, pp.35-47, 2018-03-12. Department of English, Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



# 学術英語カリキュラムの追究

— 2018年度九州大学英語新カリキュラム —

鈴木 右文

## 1. はじめに

九州大学では、2018年度から基幹教育の英語科目に新しいカリキュラムが導入される。このカリキュラムは、2014年度にいわば白紙大改正として導入されたものの改訂版で、自動車と言えばキープコンセプトの正常進化版であるが、そこに込められた意味を考察し記録しておきたい。但し、九州大学基幹教育における英語カリキュラムは基幹教育英語実施班により企画・運営されているが、本稿の内容は同班の公式な見解ではなく、あくまで筆者個人による記述であり、その内容に関して全ての責任は筆者にあることをお断りしておきたい。

第2節では2014年度に明確に学術英語を標榜して白紙大改正的に導入されたカリキュラムの概要を振り返る。第3節では2018年度にそれを受けて改訂導入されるカリキュラムの概要を提示する。第4節ではカリキュラムの修正点とその狙いについて考察する。第5節はまとめである。

## 2. 2014年度導入のカリキュラム

九州大学では1997年度のCALL教室の導入(鈴木(1998))、1999年度以降の3次元仮想空間チャットシステムの研究と授業での実験的利用(鈴木(2011))、2000年度の英語科教員団編集による英語共通教科書の導入(九州大学大学院言語文化研究院英語共通教科書編集委員会(2000)、鈴木(2000))、2006年度からの新カリキュラム実施とCALL科目の必修化(鈴木(2007))といった改革を経て、2014年度には学術英語を明確に標榜した新カリキュラムが導入された。本節ではその内容を振り返る。

2014年度からは、全学教育は基幹教育と名称を変更し、2011年10月に設置された基幹教育院が責任部局となって実施されてきている。原則として1年次に集中して教養教育を行い、基幹教育で必修の言語文化科目

の英語（ほとんどの学部が第1外国語として英語を指定）については、文系学部で7単位、工学部建築学科と歯学部と薬学部で10単位、それ以外の理系学部で8単位を履修するというところでスタートした。1年次に実質6単位、2年次以降卒業までに残余の単位分を履修することになった。

まず言語文化科目の英語科目のラインアップは以下のとおりであった。

- ・1年前期：学術英語ⅠA：一般学術目的英語初級： Semester 1 単位  
「リーディング・リスニングA」必修  
「ライティング・スピーキングA」必修  
「CALL-A」必修：授業時限と教室を持たないウェブ自律学習型訓練
- ・1年後期：学術英語ⅠB：一般学術目的英語中級： Semester 1 単位  
「リーディング・リスニングB」必修  
「ライティング・スピーキングB」必修  
「CALL-B」必修：授業時限と教室を持たないウェブ自律学習型訓練
- ・1年後期以降： Semester 1 単位  
「学術英語Ⅰ再履修」学術英語Ⅰの再履修専用  
(但しCALLはCALLで再履修)
- ・2年以降：学術英語Ⅱ：一般学術目的英語上級： Semester 1 単位  
選択必修（学部によって0～2単位、下記から選ぶ）  
「リーディング・リスニング」  
「ライティング・スピーキング」  
「オーラル・コミュニケーション」  
「テストテイキング」
- ・2年以降：学術英語Ⅲ：特定学術目的英語： Semester 1 単位  
学部によって必修  
「個別テーマ」学部専門分野を意識した総合英語能力養成  
「科学英語」科学分野を意識した総合英語能力養成
- ・2年以降：学術英語ゼミ：一般学術目的英語特級： Semester 2 単位  
選択科目（学術英語Ⅱ・Ⅲの代わりとすることもできる）  
「リーディング・リスニング」  
「ライティング・スピーキング」  
「オーラル・コミュニケーション」

## 「学術英語認定科目」（海外研修や集中講義）

このカリキュラムでは、明確に専門教育に資する学術目的の英語教育を掲げ、積上方式を採用し、1年次には学術英語Ⅰと称して前期に初級、後期に中級の訓練を実施し、2年次以降は学術英語Ⅱと称して上級の訓練を実施することとした。1年次には科目によって決められた技能を扱ったが、2年次には履修者の希望に応じた技能の養成を目指した。この他学部の教員による専門英語の学術英語Ⅲ、卒業所要単位数を超えて高度な英語を学びたい履修者向けの学術英語ゼミ（学術英語Ⅱ・Ⅲの代わりとすることも可）の категория が用意された。積み上げとしては、Ⅰ<Ⅱ<Ⅲ<ゼミの4段階であった。

この新カリキュラムでは、どの教員が担当しても学習成果に大きな差が出ないように、ガイドラインを定めて学習する内容や修得される能力を統一した。また、学術英語Ⅰの科目（「再履修」を除く）には教科書・教材についても制約を課し、「ライティング・スピーキング」では、基幹教育英語実施班が選定した4冊のうちから担当教員が選ぶこととし、「リーディング・リスニング」では、担当教員が同班に選定された数冊の教科書の中から選ぶか、同班に申請して審査を経た教科書を採用することとなり、「CALL」では、九州大学言語文化研究院英語科の複数の教員が委員会方式で製作した教材を国立七大学外国語教育連絡協議会附属CU委員会で開発したウェブ学習管理システムに搭載して使用することになった（鈴木・岡本（2015））。

この他の特徴としては、従来実施後に単位認定の申請をしていた海外英語研修（鈴木（2013））やディベート行事などについて、はじめから集中授業と位置付けて「学術英語認定科目」としたことが挙げられる。2017年度においては、「ケンブリッジ大学英語・学術研修」「モナシュ大学英語研修プログラム」「シリコンバレー英語研修プログラム（SVEP）」の海外短期英語研修プログラムや、ディベート関係のプログラムが対象であった。

また、このカリキュラムが始まった2014年度は、九州大学において10年計画の文部科学省スーパーグローバル大学等事業「スーパーグローバル大学創成支援（タイプA トップ型）」（文部科学省、「Top Global University Japan.」を参照）が始まった年度であり、偶然とは言えない面がある。また、課外で英語学習相談や英会話セッション等の英語活動を担当する

SALC (Self-Access Learning Center) が設置されたことも特筆に値する (<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~salc/> を参照) が、これも2014年度の開設であった。英語カリキュラムが一新されたのもこうした動きと連動していたことは間違いない。

### 3. 2018年度導入のカリキュラム

九州大学では、第2節で振り返った2014年度導入のカリキュラムからまだ4年しか経過していない段階で、通常のカリキュラム改訂のサイクルよりも早く、かなり抜本的な改訂が行われることになった(後述のとおり共創学部の新設と関係している)。自動車で言えば、フルモデルチェンジではないが、マイナーチェンジと呼ぶにはかなり大掛かりな改訂である。英語を第1外国語とした場合の卒業所要単位数は文系で7単位、歯学部・薬学部で10単位、それ以外の理系学部で8単位である(「九州大学基幹教育履修要項」)(新設の共創学部は12単位)。

#### 3.1 科目のラインアップ

まず、言語文化科目の英語科目のラインアップは下記のようなものへと変更となる。

- ・1年前期：学術英語 A：一般学術目的英語初中級： Semester 1 単位  
「学術英語 A リセプション」 必修  
「学術英語 A プロダクション」 必修  
「学術英語 A CALL」 必修
- ・1年後期：学術英語 B：一般学術目的英語中級： Semester 1 単位  
「学術英語 B インテグレート」 2コマ必修  
「学術英語 B CALL」 必修
- ・1年後期以降： Semester 1 単位  
「学術英語 AB 再履修」
- ・2年以降：学術英語 C：一般学術目的英語上級：クォーター 1 単位  
<学術英語 C テーマベース> (下記副題は例示で他にも可)  
「学術英語 C テーマベース：異文化理解」  
「学術英語 C テーマベース：科学技術」  
「学術英語 C テーマベース：言語」  
「学術英語 C テーマベース：文学」

- <学術英語 C スキルベース> (下記副題は例示で他にも可)  
 「学術英語 C スキルベース：オーラル・コミュニケーション」  
 「学術英語 C スキルベース：ディベート」  
 「学術英語 C スキルベース：ディスカッション」  
 「学術英語 C スキルベース：プレゼンテーション」  
 「学術英語 C スキルベース：ライティング」  
 <学術英語 C 集中演習> (下記は副題)  
 「ケンブリッジ大学英語・学術研修」  
 「Debating Japan's XXXXX Policy in English」(XXXXX 部分未定)  
 (この他国際部事業についての申請による単位認定も見込まれる)  
 ・2年以降：専門英語：特定学術目的英語：セメスター1単位

### 3.2 科目の内容

このカリキュラムは積み上げ方式であり、学術英語 A < B < C のようにステップアップする。1年次前期の学術英語 A では、下記の3科目を配置する。

「学術英語 A リセプション」：リーディングとリスニングを対象技能に受信能力養成を図る。1クラスの平均履修者数は50名前後となる。リーディングは学術的話題についての読解であり、学術研究を意識してスキミングやスキミングも取り入れられ、リスニングも講義を模した数分の分量の素材を使用する。教科書は前カリキュラムで1年次後期に使用されていたもののうちの4冊(九州大学大学院言語文化研究院学術英語テキスト編集委員会(2016), Anderson(2012), Douglas(2014), Frazier & Leeming(2013))から教員が選択することになる。従来1年次後期で使用していた教材を1年次前期に使用するため、学術英語 A は初級でなく初中級と呼ぶべきだろうと筆者は考えている。

「学術英語 A プロダクション」：ライティングとスピーキングを対象技能に発信能力養成を図る。1クラスの平均履修者数は30名台前半程度となる。ライティングは5段落程度で、引用の作法等を含みつつ学術英作文が書けるようになることが目標であり、スピーキングはプレゼンテーションを試みる。教科書は前カリキュラムで1年次前期に使用していた5冊(Zemach & Rumisek(2011), Chin et al.(2011), Savage & shafiei(2012), Foley et al.(2014), Boardman & Frydenburg(2008))から担当教

員が選択することになる。従来2学期にわたっていた科目を1つにまとめるため、プロダクションについても学術英語Aは初級でなく初中級と呼ぶべきだろうと筆者は考えている。

「学術英語A CALL」：リーディング、リスニング、文法、語法、文化を内容としたウェブ上の初級の自律学習科目であり、授業時限や教室の設定がない。教材は前カリキュラムの「学術英語I CALL-A」のものを引き継ぐ。成績は学習履歴の評価、1年次冒頭と2年次冒頭に実施される英語力診断テスト（現行ではTOEFL-ITP）のスコア、定期試験の成績から算出されるが、定期試験では『九大英単：大学生のための英語表現ハンドブック』（研究社）の一部が出題範囲となっている。また、夏期休業中のオプション範囲の学習を完了するとボーナス加点のある設計になっている。さらに、英語力診断テスト（TOEFL-ITP）で520以上のスコアを得た学生は、教材の学習と定期試験が免除されるが、2年次冒頭に再び受験する英語力診断テストで一定線以上のスコアの下落が見られる場合には成績が低くなる。

1年次後期の学術英語Bでは、下記の2科目を配置する。

「学術英語B インテグレート」：学術英語Aの成果を受け、プロダクションの要素を必ず取り込みながら、複数技能を対象とした学術英語の演習を展開する。1クラスの平均履修者数は50名前後でスタートするが、当該年度の在籍教員数によって上下動が見込まれる。演習対象の技能や教材は、学部の特性等の状況や前期に当該クラスに採用された教材等を参考に担当教員が選択する。この科目は後期に2コマ履修することになるため、同じ履修者（クラス）を担当することになる2名の教員の間で教材や授業内容の調整がある程度行われることになる。

「学術英語B CALL」：リーディング、リスニング、文法、語法、文化を内容としたウェブ上の中級の自律学習科目であり、授業時限や教室の設定がない。教材は前カリキュラムの「学術英語I CALL-B」のものを引き継ぐ。成績は学習履歴の評価、1年次冒頭と2年次冒頭に実施される英語力診断テスト（現行ではTOEFL-ITP）のスコア、定期試験の成績から算出されるが、定期試験では『九大英単：大学生のための英語表現ハンドブック』の一部が出題範囲となっている。また、春期休業中のオプション範囲の学習を完了するとボーナス加点のある設計になっている。さらに、英語力診断テスト（TOEFL-ITP）で570以上のスコアを得た学生

は、教材の学習と定期試験が免除されるが、2年次冒頭に再び受験する英語力診断テストで一定線以上のスコアの下落が見られる場合には成績が低くなる。

また、1年後期以降に、「学術英語 AB 再履修」が開講される。これは「学術英語 A リセプション」「学術英語 A プロダクション」「学術英語 B インテグレート」専用の再履修科目であり、「学術英語 A CALL」「学術英語 B CALL」の再履修はそれらの科目を再度履修することによって行われる。*Really English* という商用ウェブサイトの教材からこの科目用に編集された教材を用いて、授業時限や教室を持たない形での自律学習が行われ、学習履歴に基づいて合否のみの成績判定にて単位が認定される。成績認定を担当する教員やその作業については、今後検討・決定される予定である。

2年次以降は学術英語 C と専門英語が配置され、どのように履修を進めるかは学部学科等によって異なる（但し2018年度新入生が2年生になる2019年度から始まる）。専門英語は学部の非英語系の教員によって実施される特定学術目的の英語に関する科目になり、詳細は各部局の管轄となるため、ここでは特に言及しない。一方学術英語 C は以下のように3つの範疇に分かれる。原則として学生は「テーマベース」「スキルベース」の中の諸科目から自らの意思により選択して履修することになる（もちろん満員札止めがあり得るので完全に自由というわけではない）。なお、学術英語 C の再履修が必要な場合には、学術英語 C の科目にて再履修を行うことになる。

「学術英語 C テーマベース」：上級科目で、履修者数は最大60名程度の規模となる。クォーター科目で8回の授業にて1単位となるが、課題等授業外での学習を多く伴い、学習内容が1単位分となるように授業が設計される。内容はテーマ別で、まず「異文化理解」「科学技術」「言語」「文学」などが設定される予定だが、教員により多様になる可能性がある。

「学術英語 C スキルベース」：上級科目で、履修者数は最大30名程度の規模となる。クォーター科目で8回の授業にて1単位となるが、課題等授業外での学習を多く伴い、学習内容が1単位分となるように授業が設計される。内容はスキル別で、まず「オーラル・コミュニケーション」「ディベート」「ディスカッション」「プレゼンテーション」「ライティング」などが設定される予定だが、今後留学用授業など担当教員によりさ

らに多様になる可能性がある。

「学術英語 C 集中演習」：短期研修プログラムやイベントプログラムのうち、言語文化研究院が主体となって運営する「ケンブリッジ大学英語・学術研修」「Debating Japan's XXXXX Policy in English」（XXXXX 部分未定）が正規授業科目となり、ABC 方式での成績がつく。この他、九州大学国際部の企画担当により全学の学生が対象となる「モナシュ大学英語研修プログラム」「シリコンバレー英語研修プログラム」「ブリティッシュ・コロンビア大学英語研修プログラム」「ヴィクトリア大学英語研修プログラム」「クィーンズランド大学英語研修プログラム」については、実施後の申請により、「学術英語 C 集中演習」として、合否のみの成績判定の形で、単位認定が行われる。

最後に、2018年4月に共創学部が新設されるが、この学部はここまで記述した内容のものとは別の独自の英語カリキュラムを持つことになる。これは、前カリキュラムで21世紀プログラム（2018年度新入生からは共創学部へ吸収される）が独自の英語科目も擁していたことを受け継いだものと言える。「インテンシブ英語」と称し、すべてクォーター科目1単位（週当たり2コマ連続開講）で、1年次に下記のように10単位分の科目が配置され、原則としてすべて英語で授業が実施される。

春学期：「Global Issues: Reading & Writing 1」「Academic Issues 1」

「Global Issues: Listening & Speaking 1」

夏学期：「Global Issues: Reading & Writing 2」「Academic Issues 2」

「Global Issues: Listening & Speaking 2」

秋学期：「Japanese Issues 1」「Academic Issues 3」

冬学期：「Japanese Issues 2」「Academic Issues 4」

実は通例よりも短いサイクルでのマイナーチェンジ以上のカリキュラム改訂となったのは、この新規開設の共創学部が独自の英語カリキュラムを組むことが最大のきっかけであった。

#### 4. カリキュラムの修正点と学術英語教育の深化

前カリキュラムから新カリキュラムへの変遷を見ると、新カリキュラムに込められた理念や背景が見えてくる。

まず積み上げ方式が、前カリキュラムではレベルが I < II < III < ゼミの4段階であったが、新カリキュラムでは A < B < C の3段階となる。

レベル分けが減っているように見えるが、Ⅲが学部が独自に展開するものであった上、ゼミはごく少数の意欲ある学生だけが履修するものであったため、言語文化研究院が大多数の履修者を対象に担当する部分に限れば、むしろⅠ<Ⅱの2段階がA<B<Cの3段階に増えると捉えることができる。この場合、前カリキュラムでは、レベルⅠの科目名の中に前期がA後期がBの表記があって、グレードが異なることを表していたものが、新カリキュラムでは、1年次の前後期でレベルが異なることをより明確にし、積み上げ方式を強化したと言える。

さらに、新カリキュラム1年次前期AのCALLでない2科目の学習内容または教科書には、前カリキュラムの1年次後期のものも採用されるため、カリキュラム全体で到達する英語力のレベルを高めようという意図が読み取れる。

カリキュラム全体で到達する英語力を高めようという意図は、1年次のABの科目内容の違いにも表れている。1年次前期Aの科目はリセプションまたはプロダクションに特化して技量の向上を効率的に図るものだが、1年次後期Bの科目はこの区分けにこだわらず、大学生に不足しがちなプロダクションの要素を必ず含みつつ、学部学科等の状況に適合した複数技能の組み合わせで総合的な演習を行い、学術英語としての実用性を固めていく目的を持っている。しかも、後期はこの科目を2つ履修することとなっており、実用的な学術英語をしっかりと固めることが期待される。

ところが、2つのカリキュラムをよく比べてみると、ライティングを行う科目としては、前カリキュラムでは「ライティング・スピーキング」が1年次前後期に1つずつあったのに対し、新カリキュラムでは前期Aの「プロダクション」1つだけになっていて、ライティング教育が後退しているように見える。しかし前カリキュラムでの2つの「ライティング・スピーキング」の間にはかなりの重複が見られ、担当教員の中にはその重複を除去すればもっと少ない授業回数で実施することができるという意見があり、前期Aに集約して学術論文の初歩まで持っていく、学部学科等によりさらなる訓練が必要であれば、後期Bの科目にライティングの要素を盛り込むことで対応することとした。

新カリキュラム1年次にはこの他「学術英語A CALL」「学術英語B CALL」と「学術英語AB再履修」とがある。CALLの科目は基本的に

前カリキュラムのものと変わらない。再履修科目についても目的は変わらないが、開講方式は大きく変わる。前カリキュラムの「学術英語Ⅰ再履修」では、教室に外国語授業とは言えないような大人数の履修者が集まって、読解を中心にした講義スタイルとも言える対面授業が行われた(2018年度前期まで実施される)。これに対し新カリキュラムでは(2018年度後期から)、授業時間帯と教室を持たない科目とし、CALL科目と同様、ウェブ上の教材で読解や聴解を中心としたドリル問題に、履修者ひとりひとりの都合に合わせた時間と場所において、個人のペースで取り組むこととなった。ウェブ学習では、学ぶ側がアクションを起こさないと何も進まないため、前カリキュラムではいたかもしれない居眠りで時間をやり過ごすような履修者はあり得ず、学習を怠れば学習未了で単位が認定されないことになる。内容は学術英語Aと学術英語Bの再履修にあたって共通のものになるため、整合性が取れていないようにも見えるが、本来の科目で成果をあげることができない学生の基盤的英語力を作り直してもらうことには意味がある。また、授業時限の確保が不要になるおかげで、学生の時間割作成の自由度を損なうことがないということも新たな利点である。

2年次には学術英語Cを履修する。学術英語Cの諸科目は「テーマベース」「スキルベース」「集中演習」のカテゴリーに分かれる。「テーマベース」「スキルベース」はクォーター科目で、8回の授業で1単位となり、他のセメスター科目の2倍の単位を持つと言えるが、これは、上級科目となっていて、それに見合った授業外学習を課す設計としているからであり、履修者にとってはセメスター科目並のワークロードが与えられることになる。外国語の訓練には短期集中が好ましいことは疑う余地がなく、学術英語Cでは密度を上げてクォーターで実施するということである。また、これらのカテゴリーの中の諸科目から履修するものを選択できるということは、2年次になってそれぞれの目的に合わせた科目を履修できるようにという配慮の結果である。

学術英語Cには「集中演習」のカテゴリーに入る科目もある。これに関しても一見若干の後退と見える部分がある。前カリキュラムでは、国際部が関係している「モナシュ大学英語研修プログラム」「シリコンバレー英語研修プログラム」の2つが、最初から正規学術英語科目として参加者が募集されていたのだが、新カリキュラムでは、事業の終了後に

申請して単位を認めるものの、合否のみ（パス／フェイル）の成績となる。これは、最初から正規学術英語科目としてしまうと、現地でのフィールドワークについての引率体制を構築して大学に事前申請する、安全指導等の事前研修に立ち会う、参加者に対して最低限のケアを行うなど、単位認定にあたる担当教員が、形式上担当者になるというだけではとても済まないため、その職責を負いきれないという現実があり、本当に自分で企画運営を実質的にしているプログラムについてのみ正規科目として扱うというように切り分けたためである。だが、このように切り分けたおかげで、「ブリティッシュ・コロンビア大学英語研修プログラム」「ヴィクトリア大学英語研修プログラム」「クィーンズランド大学英語研修プログラム」についても「学術英語C集中演習」として（事後申請により合否だけの判定となるのではあるが）位置付けることができることになる。

最後に、これは英語教員団だけのものではないが、このカリキュラム改訂と同時に、基幹教育の中で外国語ではない科目（フロンティア科目）として「外国語プレゼンテーション」という後期のクォーター科目が始まる。前期の「学術英語Aプロダクション」を受けた後、能力の高い学生のプレゼンテーション力を伸ばす後期科目とぜひしたいと考える。

以上のように、新カリキュラムには随所に改善点が見られ、学術英語プログラムとしてさらに深化したと評価できるものと考えている。

## 5. 終わりに

本稿では、2018年度に始まる九州大学基幹教育言語文化科目の新しい英語カリキュラムについて、前カリキュラムとの比較考察を行い、その学術英語カリキュラムとしての深化を主張した。

### 参考文献

九州大学英語表現ハンドブック編集委員会（2014）『九大英単：大学生のための英語表現ハンドブック』研究社。

九州大学基幹教育院、『九州大学基幹教育履修要項』（平成29年度入学者用）、2018.1.7アクセス、<[http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/campus\\_life/pdf/29youkou.pdf](http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/campus_life/pdf/29youkou.pdf)>. PDF.

九州大学大学院言語文化研究院英語共通教科書編集委員会（2000）『A Passage to English 大学生のための基礎的英語学習情報』九州大学出版会。

九州大学大学院言語文化研究院学術英語テキスト編集委員会（2016）『Authentic Reader:

- A Gateway to Academic English オーセンティック・リーダー』研究社。
- 鈴木右文 (1998) 「CALL システムによる外国語教育とその諸問題—新規導入した九州大学の場合—」『言語文化論究』(九州大学大学院言語文化研究院) 第9号、161-72頁。
- 鈴木右文 (2000) 「英語共通教科書の試み」『英語英文学論叢』(九州大学英語英文学研究会) 第50集、55-85頁。
- 鈴木右文 (2007) 「九州大学の英語新カリキュラムと CALL 科目の導入」『言語科学』(九州大学大学院言語文化研究院言語研究会) 第42号、1-11頁。
- 鈴木右文 (2011) 『仮想空間文字チャットによる英語対話演習授業—実践10年の総括—』(九州大学大学院言語文化研究院 FLC 叢書IV) 花書院。
- 鈴木右文 (2013) 『ケンブリッジ大学英語・学術研修への招待 名門校で学ぶ、暮らす、国際人になる』、九州大学出版会。
- 鈴木右文 (2014) 「大学英語教育の目指す方向—九州大学の英語新カリキュラムの狙い—」『英語英文学論叢』(九州大学英語英文学研究会) 第64集、19-35頁。
- 鈴木右文・岡本太助 (2015) 「授業時間のない科目向け英語ウェブ教材デザインの試み—九州大学新 CALL 科目と新教材—」『言語科学』第50号、1-21頁。
- 文部科学省. “Top Global University Japan.” Web. 2018.1.7アクセス. <<https://tgu.mext.go.jp/universities/index.html>>.
- Anderson, Neil J. (2012) *Active Skills for Reading 2 (3rd ed.)*. Heinle & Heinle Publication.
- Boardman, Cynthia A. & Jia Frydenberg (2008) *Writing to Communicate 2: Paragraphs and Essays*. Pearson Longman.
- Chin, Peter, Samuel Reid, Sean Wray & Yoko Yamazaki (2011) *Academic Writing Skills 1*. Cambridge University Press.
- Douglas, Nancy (2014) *Reading Explorer 3 (2nd ed.)*. Heinle Cengage ELT.
- Foley, Barbara, Elena Solomon & David Clabeaux (2014) *Great Writing 3: From Great Paragraphs to Great Essays (3rd ed.)*. Cengage Learning.
- Frazier, Laurie & Shalle Leeming (2013) *Lecture Ready 3: Strategies for Academic Listening and Speaking (2nd ed.)*. Oxford University Press.
- Savage, Alice & Masoud Shafiei (2012) *Effective Academic Writing 1*. Oxford University Press.
- Zemach, Dorothy E., & Lisa A. Rumisek (2011) *Writing Essays: From Paragraph to Essay*. Macmillan Education Australia.

## Going Further in Pursuit of Academic English Curriculum —2018 Curriculum at Kyushu University—

Yubun SUZUKI

In this paper, the author attempts to summarize and analyze the new English curriculum starting in the academic year 2018 at Kyushu University (the new undergraduate school of Kyoso has its own English curriculum) in comparison to its older version established in 2014, focusing on the newer version's stronger emphasis on academic English.

The 2018 version consists of the following courses:

<First Semester, First Year>

Academic English A: Reception / Academic English A: Production

Academic English A: CALL

<Second Semester, First Year>

Academic English B: Integrated (2 classes)

Academic English B: CALL

<Second Semester, First Year, or Later>

Academic English AB: Repeated

<Second Year or Later>

Academic English C: Theme Based (Cross-Cultural Understanding / English for Science / Literature / Language)

Academic English C: Skill Based (Oral Communication / Debate / Discussion / Presentation / Writing)

Academic English C: Intensive (Short-Term Study-Abroad Programs / Debate Programs)

Expert English (available for students of some departments)

The author claims that the new curriculum is a still more appropriate academic English program with a strengthened step-up structure, higher aims of study, a higher academic practicality, more intensive courses, and stronger international orientation than its older version.